

大学生の野外活動場面におけるリスク認知に関する研究 ～性格特性に着目して～

犬伏 光治郎 (生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)
指導教員 林 綾子

キーワード：野外活動, リスク認知, 性格特性

1. 序論

近年野外活動の人気の高まり, 参加人数は増加傾向にある一方で事故が多くおきており, リスク認知の重要性が指摘されている. 2017年3月にスキー場付近で雪崩に巻き込まれ死亡者を出すという事故が発生しており, リスク認知についての議論が活発になっている. リスクとは, 事物に対して損害を与える可能性であり, その危険性についての認知をリスク認知という. リスク認知については, 経験との関連が報告されており, 筆者は, 個人的特性との関連についても重要であると考え, 特に性格特性との関係に興味を持った.

そこで本研究は, 野外活動場面におけるリスク認知と性格特性の関連を明らかにすることを目的とした. リスク認知については, 「緊急性」, 「可能性」, 「重大性」の3つの側面に着目した.

2. 研究方法

【対象者】B大学に所属している1-4年次生計124名を対象とした.

【調査内容】性格特性を測定するために小塩ら(2012)が作成した日本語版 Ten Item Personality Inventory 5 因子(外向性, 協調性, 勤勉性, 神経症傾向, 開放性)10項目を用いた. 野外活動経験を日数にてたずね, 1項目を用いた. リスクを測定するために, 2つの場面の危険予知トレーニングシートを用いて, 計18個のリスク場面に対し「緊急性」, 「可能性」, 「重大性」を割り当てた. そのシートに対して危ないと思うところに○をつけ, 理由を記述してもらった. また特定したリスクについて, 危険度を5段階尺度によって評価してもらった. 記入時間は, 5分と設定した.

3. 結果及び考察

1) 野外活動経験日数とリスク認知の関係

経験日数を用いて4つの群で分け, リスク認知との関係をKruskal-Wallis検定にて明らかにした. その結果, 野外活動経験日数の4つの群の間で有意な差が見られた(表1). Mann-Whitney検定を用いて多重比較を行った結果, 50日以上 of 野外活動経験のある4群が4-12日の経験の少ない1群に対して有意に多くのリスクを特定していたことが明らかになった. リスク発見数が経験日数の多い群のほうが多く, 村越(2007)は, 野外活動の経験があるとリスク認知能力が高いと報告しており, 本研究でも同様の結果となった. 多くの野外活動を経験していくことで, リスクに直面する場面が増え, リスク認知が高まると考えられる. 野外活動経験日数と「緊急性」, 「可能性」, 「重

大性」の種類別で同様に分析した結果, 有意な傾向がみられた($\chi^2=7.56^*$, $\chi^2=7.35^*$, $\chi^2=7.40^*$). 「緊急性」, 「可能性」, 「重大性」それぞれ, 経験が多い人がよりリスク認知できることが明らかになった.

表1: 野外経験とリスク特定数(中央値)のKruskal-Wallis検定の結果

Median				$\chi^2(2)$
1群(4-12日)	2群(13-25日)	3群(28-40日)	4群(50-200日)	
7.5	8.5	9	10.5	9.99*

* $p < .05$

2) 野外活動経験日数とリスク評価の関係

野外活動経験日数とリスク評価の関係をKruskal-Wallis検定を行った. その結果, 有意な差がみられたのは「帽子をしていない」ために怪我の「可能性」があるというリスク1つのみであった($\chi^2=8.875^*$). 村越(2007)の研究でリスク評価は, 野外経験が増えるにつれ重く評価すると述べられており, 本研究でも, 野外経験が増えるにつれリスク評価を重くとらえられていた.

3) 性格特性とリスク認知の関係

5つの性格特性の群とリスク認知数の関係をKruskal-Wallis検定にて明らかにした. その結果, 有意な差はみられなかった($\chi^2=2.63 n.s.$). 本研究では性格特性によるリスク認知に差はみられなかった.

4) 性格特性とリスク評価の関係

性格特性で5つに分けた群とリスク評価の関係をKruskal-Wallis検定にて明らかにした. その結果, 有意な差が見られなかった($\chi^2=7.252 n.s.$). 本研究では性格特性によるリスク評価に差はみられなかった.

4. 結論

本研究では, 野外活動経験50日以上という経験がリスク認知能力の高さと関係していることが明らかになった. 本研究での「緊急性」, 「可能性」, 「重大性」についても同様の結果であったが, 野外活動経験の程度について日数以外の内容を具体的に調査する必要がある. 性格特性との関連は, 見られなかった.

本研究では, スポーツを専攻する大学生のみを対象としているため一般化を図るには, より多くの人を対象とする必要がある. また, 個人特性の調査方法についても検討が必要である.

引用文献

村越真・若月朋子(2007)組織キャンプにおける指導者およびキャンパーのヒヤリ・ハット事例の認知. 野外教育研究, 11(1):73-82.